



アイヌ語が響く公共空間を目指して ～アイヌ語による車内アナウンスを実施中～

内閣官房アイヌ総合政策室北海道分室

2018年4月1日から、道南バス株式会社（本社：室蘭市）が運行する3路線でアイヌ語による車内アナウンスを実施しています。高速ひだか号（日高ターミナル～札幌駅前）、特急ひだか号（日高ターミナル～苫小牧駅前）、そして日高富川高校線（富川高校前～日高ターミナル）の、いずれも平取町内の区間（新日東～紫雲古津）において、「お降りの方はお知らせください。／ラパン ルスイ チキ ウンヌレ ヤン」等のバス利用者に対するご案内を日本語、アイヌ語の順に放送しています。公共交通機関におけるアイヌ語アナウンスの導入は、全国で初めての試みです。



アナウンス実施をお知らせするポスター



高速都市間バスは室蘭車両（イメージ）

＜アイヌ語の現状とプロジェクト始動の経緯＞

日本列島北部周辺の先住民族アイヌは、独自の言語であるアイヌ語を使用してきました。しかしながら、

明治以降、北海道への入植を進める政策によって、アイヌの文化は大きな打撃を受けるとともに、日本語を使用しなければ社会生活を送ることが困難となり、役場における手続など公的な場はもとより、日常生活においてもアイヌ語を使用する機会が失われ、今日の言語存続の危機を招く契機となりました。(2009年、アイヌ語はユネスコ(国連教育文化機関)により「極めて深刻」な消滅の危機にあると指摘されています。)

現状、アイヌ語の復興に向けた取組は、大学の授業や各地で開催されているアイヌ語教室への参加など、いわば特別な場での学習が主流となっているところ、昨年春、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原モコットウナシ准教授から、アイヌ語のさらなる普及・復興のためには、アイヌ語が流れる公共空間を創出することが重要であること、その第一歩の取組として公共交通機関のアイヌ語アナウンス導入につきご提案があったことをきっかけに、実現の道を模索し始めました。

＜アナウンス開始までの道のり＞

いくつかの交通事業者に感触を伺う中、昨年9月、とりわけ日高・胆振地域において多くの路線を運行する道南バス株式会社が当プロジェクトの趣旨に賛同くださり、以後、具体的な検討を進めることとなりました。

実施地域・方言の選定について、アイヌ語には方言があり、隣り合った地域でも表現が異なる場合があります。通過する地域によって表現が変わってしまうとバス利用者に混乱を与えるおそれがあることを踏まえ、まずは、ひとつの方言、特定のエリアに絞った方が良いのではないかと考えました。

そして、沿線にお住まいの方のご理解・ご協力を得ながらプロジェクトを進めるに当たり、独自の文化を継承し、アイヌ文化を中心とした街づくりに先進的に取り組む平取町から、町民の皆さんへの周知をはじめとする積極的なサポートの表明があったことを受け、平取町内の区間において沙流方言によるアナウンスを

実施することとなりました。

アナウンス内容の検討、アナウンス原稿の執筆、解説リーフレットの内容・デザインの検討等、各準備に当たっては、道南バス株式会社、平取町アイヌ施策推進課、北原准教授、平取町二風谷アイヌ文化博物館の関根健司学芸員補、アイヌ工芸家の関根真紀さんによる検討委員会を立ち上げ、それぞれの専門の立場から助言・協力をいただきました。

バス車内等で配布するリーフレットには、アナウンス解説やアイヌ語のバス停名、アイヌ語由来の地名の解説等を掲載しています。バス停の名称は、基本的に付近の現在の地名や付近にある施設名等に基づいて設定されていますが、昔と現在とで地名の位置が変わっているケースが多くあり、当プロジェクトでは、バス停名を日本語からアイヌ語に置き換えるに当たって、可能な限り旧地名を掘り起こし(52箇所中18箇所)、アイヌ語のバス停名としてご案内することとしました。また、昔は存在しなかった施設等(例：学校、病院など)を表現するための新しい言葉も作りました。

検討委員会での議論を重ね、今年2月、アイヌ語アナウンスの収録を行いました。アナウンスは、アイヌ民族の大学生でアイヌ語ラジオ講座の講師等を務める関根麻耶さん(平取町出身)にお願いし、北原准教授、関根健司さんによる発音指導の下、収録の現場においてもフレーズやトーンなどの調整が行われました。



アナウンス収録の様子

<アイヌ語が自然に流れる公共空間を目指して>

約半年の準備期間を経て、アイヌ語車内アナウンス開始日の前日である今年3月31日、平取町内でお披露目のセレモニーを開催しました。町民の皆さんと一緒にバスの車内で初めてアナウンスを聞いた際、「俺が住んでいる地域、今は〇〇と呼ばれているけど昔は〇〇だったんだよなあ」、「普段は車ばかりだけど、アナウンスを聞くためにバスに乗ってみようかな」等のお話を伺って、アイヌ語普及・復興のプロジェクトであると同時に、自身が住む地域やその歴史、アイヌ文化にあらためて触れていただく一助となることのできたのではと感じています。

アイヌ語が自然に流れる公共空間が徐々に広がることによって、多くの方が最初はそれがアイヌ語だと気付かない、あるいはアイヌ語だと気付いても意味まで



2018年3月31日スターティングセレモニーの様子（平取町にて）

はわからないといった状況から、繰り返し耳にすることでアイヌ語であることを知り、あるいはその意味やアイヌ文化に関心を寄せ理解が深まっていく、本プロジェクトがそのきっかけとなることを期待しています。

身近なアイヌ語 ～アイヌ語由来の地名～

身近なアイヌ語のひとつに「地名」があります。北海道の地名の多くはアイヌ語に由来しており、このたびアイヌ語アナウンスでご案内する区間にも、アイヌ語由来の地名がたくさんあります。アイヌ語地名は大切な歴史遺産であり、それを通じて地形の特徴や地名が付された当時の生活の様子などを知ることができます。

地名	読み方	由来
1 紫雲古津	しうんこつ	スム・ウン・コツ(西の・くぼみ)ス・ウン・コツ(鍋の・くぼみ)などの説がある。
2 去場	さるば	サラ・バ(ヨシ原の上手)。ヨシ原の下手ならサラ・ケツ(ヨシ原の下手)となる。沙流川の沙流もこのサラが語源。
3 荷菜	にな	ニナ(ヒラメ)。大昔、津波で海の魚であるヒラメがこの辺りまで打ち上げられたという故事から。
4 平取	びらとり	ピラ・ウトゥル(崖の間)。元々は現市街地の対岸にあるベンケ(川上)とパンケ(川下)2つの沢に付けられた名前だった。
5 小平	こびら	ク・オ・ピラ(弓・ある・崖)。動物を取るための仕掛け弓を設置した崖だったと言われている。
6 二風谷	にぶたに	ヌフ・タイ(野原・林)、ニフ・タイ(刀などの柄・林)、ニ・タイ(木・林)などいろいろな説がある。
7 荷負	におい	ニ・オ・イ(木・ある・所)。森や林のことではなく、川の合流点なので流木がたくさん溜まる場所という意味らしい。
8 長知内	おさちない	オ・サツ・ナイ(川尻・乾く・川)。濁水期になると水が地下を通るなどして川尻が乾く川をこう呼ぶ。
9 振内	ふれない	フレ・ナイ(赤い・川)。鉱物質などを含むため川底が赤茶けて見える川などをこう呼ぶ。
10 仁世宇	にせう	ニセウ(ドングリ)、ニセイ(箱のような崖)などの説がある。
11 岩知志	いわちし	イワチシ(岩山)、イワ・チシ(壘山のくぼみ)、イワン・チシ(六つの・岩)などの説がある。
12 貫気別	ぬきべつ	ヌッキ・ベツ(濁る・川)。少しでも雨が降ると川の水が濁るのでこの名が付いた。
13 芽生	めむ	ムム(湧き水)。湧き水があり、良い飲み水を得ることが出来たので付いた地名。
幌尻岳	ほろしりだけ	ポロ・シリ(大きい山)。海のコンブやトド、アザラシなどが頂上近くの沼に生息しているという伝説が残るカムイ(神)の領域。

車内配布リーフレットより